

NRI 学生小論文コンテスト2015

募集告知から審査、 そして表彰まで

“目指したい未来社会”を描く 小論文コンテストがスタート!

2015年のコンテストは、NRIのホームページ上に4月30日に募集要項が発表され、スタートしました。今年も1人でも多くの学生の皆さんにコンテストをお知らせし、論文を応募していただきたいと、告知活動を展開しました。全国の高校や大学に案内を送り、チラシやポスター、受賞論文記録集を配布。新聞や雑誌にも広告を掲載し、応募を呼びかけました。

世界に向けて未来を提案

世界のいたるところで、政治・経済・社会に大きな影響を与える事態が相次ぎ、将来の不透明感、閉塞感は強くなっています。NRIは、次代を担う若者が日本から世界に向けて未来を提案し、行動することは、これを打破し、新たな時代を切り開いていくことにつながると考えています。

“2030年に向けて—— 「守るもの」、「壊すもの」、「創るもの」 というテーマ

学生の皆さんが社会の中核となって活躍している2030年、その時代に向けて、皆さんの世代がどんな夢を描き、その実現のために、何を「守り」、「壊し」、「創っていく」のか——。このテーマは、皆さんの世代に「自分たちの未来を自ら切り拓いていく」という主体的な意思と責任感を持って具体的な行動を起こし、よりよい未来社会を創る原動力になってほしいという想いを込めて設定しました。

ペア応募のねらい

「互いに議論し合うことは、考えをより深めることにつながる」という考えから、2011年のコンテストからペア応募を受け付けています。

第10回 NRI学生小論文コンテスト2015 野村総合研究所 主催

募集テーマ (抜粋) **世界に向けて未来を提案しよう!**

2030年に向けて——「守るもの」、「壊すもの」、「創るもの」

今から15年後、皆さんが社会の中核となって活躍する2030年代、日本は、世界はどんな姿になっているでしょうか？
皆さんが今よりもっとわくわくした毎日をおくり、社会も豊かになっている姿(様子)を描いてみてください。

「守破離(しゅはり)」という言葉があります。
創造や革新など「造」の世界で、修行の段階を表す言葉です。「守」で基本となる教え(型)を学んで身につけ、次に「破」で、「守」の段階で作られた既存の殻を破って自分の型を見出し、そして最後の「離」で、「守」「破」で体得した型から離れ、独自の道を自在に作って、道を究めていくという考え(思想)です。
「守破離」のような視座で未来像を描けないでしょうか。

今あることの中で、まず残したい、尊重したい伝統や文化は「守る(守)」、次に固執依然とした規制や人々の自由を奪う慣習などを「壊す(破)」、そして技術革新やグローバル規模での相互交流を通じて、全く新たな仕組みや価値を「創る(離)」。

未来は誰にも分かりません。新しい社会の実現を目指すために、何を「守り」、「壊し」、「創っていく」のか、その中であなたがどのように関わりたい(貢献したい)のかを、皆さんの知識や実践に基づいた独自の観点からまとめてください。

※テーマの詳細は、下記の「コンテストホームページ」をご覧ください。

大学生の部
賞【大賞1名】賞金50万円【優秀賞 若干名】賞金25万円【奨励賞 若干名】賞金5万円
字数：4,500～5,000字(別途400字程度の要約を添付)
応募資格：日本国内の大学院、大学、短大、高等専門学校(4～5年)に在籍している学生で、2015年7月1日時点で27歳以下の**個人またはペア**(ペアの相手は、大学生の部、留学生の部、高校生の部の応募資格者のいずれでも可)。

留学生の部
賞【大賞1名】賞金50万円【優秀賞 若干名】賞金25万円【奨励賞 若干名】賞金5万円
字数：4,500～5,000字(別途400字程度の要約を添付)
応募資格：日本国内の大学院、大学、短大、高等専門学校(4～5年)、日本語学校に在籍している留学生で、2015年7月1日時点で30歳以下の、**個人またはペア**(ペアの相手は留学生の部の応募資格者に限る)。

高校生の部
賞【大賞1名】賞金30万円【優秀賞 若干名】賞金15万円【奨励賞 若干名】賞金3万円
字数：2,500～3,000字(別途200字程度の要約を添付)
応募資格：日本国内の高校、高等専門学校(1～3年)に在籍している学生で、2015年7月1日時点で20歳以下の、**個人またはペア**(ペアの相手は高校生の部の応募資格者に限る)。
※大学進学をめぐって悩んでいる大学受験資格を持つ学生の方は、大学生の部にご応募ください。

募集期間
【大学生の部】【留学生の部】2015年7月1日(水)～9月5日(土)
【高校生の部】2015年7月1日(水)～9月14日(月)

・オンライン送信の場合は、締め切り日当日中に事務局で受信したものとまで有効
・郵送の場合は、締め切り日までに「必着」

【応募方法】
下記の「コンテストホームページ」でテーマ詳細や応募要項を確認の上、「応募用紙」をダウンロードし、必要事項と論文(本文、要約)を記入して、以下のいずれかの方法でお送りください。
●「コンテストホームページ」の応募画面からオンラインで送信
●CD-Rに保存の上、下記、コンテスト事務局に郵送(CD-Rは郵送いたしません)
●応募用紙に手書きしたものを、下記、コンテスト事務局に郵送(事前に電話またはE-mailでご連絡下さい)

【審査方法】
野村総合研究所社員による一次審査の後、理事長の谷川史郎を委員長、ジャーナリスト・東京工業大学教授の池上彰氏、ノンフィクションライターの最相葉月氏を特別審査委員、社員数名を委員とする審査委員会による最終審査を行います。

特別審査委員
ジャーナリスト 池上 彰氏
ノンフィクションライター 最相 葉月氏

【入賞者の発表】



全国の学校や書店で コンテストへの応募を呼びかけました

全国の大学のインフォメーションコーナーや書店などに、ポスターやチラシを掲示して、コンテストをアピールしました。また、今年もNRIグループの社員有志が出身校等への告知活動を行いました。メッセージを添えてポスターやチラシを送ったり、実際に学校に足を運び、直接学生たちにコンテストを紹介しました。(詳しくはP.72)



フェリス学院大学 学生ラウンジ 中央大学 商学部



早稲田大学 早稲田キャンパス 同志社大学 今出川キャンパス・書店



鹿児島大学 郡元キャンパス 東京大学 本郷キャンパス 弘前大学 食堂

厳正な審査を経て、 入賞論文を決定しています。

入賞論文は、予備審査→1次審査→2次審査→最終審査会という4つのステップを経て、決定しています。

どの審査段階においても、規定の評価基準に基づき、応募者の学校名、名前などの属性を秘匿したうえで、厳正に審査を行っています。

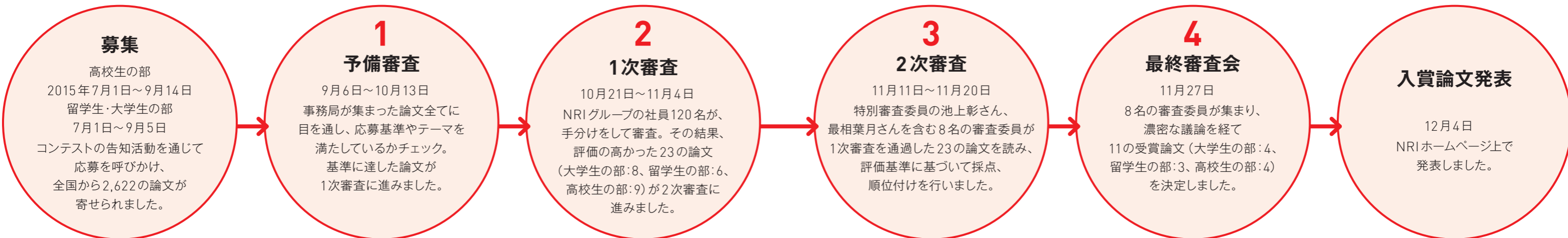
また、評価が偏らないように、1つ1つの応募作品を複数の者が評価しています。



論文審査の評価基準

- テーマと論点に整合性はあるか？
- 提案力はあるか？
 - ・提案や解決策の独自性・実現性
 - ・提案や解決策のスケールの雄大さ、視野の広さ
 - ・提案内容、主張の明快さ
- 考察力・分析力が優れているか？
 - ・論点やテーマ、着眼点の独自性・斬新さ
 - ・具体例や数値を使用するなど、論点の分かりやすさ
 - ・論点への考察の深さ
- 文章力は高いか？
 - ・論文構成の分かりやすさ
 - ・文法の正しさ、誤字・脱字の少なさ
- 評価基準以外のプラスアルファ
 評価基準に該当しない観点においても、特に評価が高い論文は加点
 (例：独自の調査・取材の実施、執筆者の熱い想いなど)

「NRI学生小論文コンテスト2015」審査ステップ



濃密な議論を経て、 入賞論文を決定しました



最終審査会参加者

審査委員長

谷川 史郎 NRI 理事長

特別審査委員

池上 彰 ジャーナリスト・東京工業大学教授

最相 葉月 ノンフィクションライター

審査委員

三浦 智康 執行役員 未来創発センター センター長

淀川 高喜 研究理事

中野 ひなつ 証券ソリューション事業本部 HRM 室 室長

山之内 亜由知 生産革新ソリューション開発二部 上級システムコンサルタント

野呂 直子 コーポレートコミュニケーション部 部長

NRIグループ社員による1次審査を、23の論文
(大学生の部8、留学生の部6、高校生の部9)が通過しました。

2次審査には、審査委員長を務めるNRI理事長の谷川史郎をはじめとする
社内審査委員に加えて、池上彰さんと最相葉月さんを特別審査委員に迎え、
8人があたりました。

まず、審査委員各自が1次審査を通過した全ての論文を読み、
審査基準に基づいて評価、順位付けを行いました。

事務局がその結果を集約し、2015年11月27日に最終審査会を開催。
3時間におよぶ議論を経て、11の受賞論文(大学生の部4、留学生の部3、
高校生の部4)を決定しました。

審査委員長

谷川 史郎 NRI 理事長

「こんな2030年にしたい」という、自分が目指す社会の姿を、「守る」「壊す」「創る」という枠組みを踏まえて論じることは、大変難しかったと思います。この枠組みをベースにしながら論理を展開し、他の人には書けない独自の提案をしているかどうか、審査する上で大きな軸となりました。結果的に「この論文を書いた人に来てみたい」と強く思わせるような作品が、入賞作品として残ったのではないかと感じています。

ぜひ今後も皆さんの抱いた問題意識を長期に持ち続けて、それを次のステップでも解決に向けて掘り下げていただけてことを期待しています。



特別審査委員

池上 彰 さん ジャーナリスト・東京工業大学教授

今回のコンテストも、総じてレベルの高い作品が多かったと思います。特に、高校生からの応募が増えたことによって、高校生の部のレベルが例年以上で、大変読み応えがありました。また、今回は従来のスケールに収まらないような、ユニークな視点から書かれた作品が多く、それらが選考に残った点も特徴的でした。あえて付け加えるなら、自身の提案を批判的に再検討する目を持つことによって、提案の中身をさらに一歩突っ込んだものにする力を身に付けてほしいと思います。



特別審査委員

最相 葉月 さん ノンフィクションライター

今回の応募論文に共通して見られたのは、18歳への選挙権年齢引き下げに伴う「政治参加」や、どのように「行動」するか、「問題解決」を図るか、また、「思いやり」などのキーワードでした。自分が考えているようなことは人も考えているものなので、論文のテーマや問題解決策が重なることはよくあることです。では、みんなが同じようなことを考えているのに、それが解決できていないのはなぜなのでしょう。そういった点について「私はこう思う」と独自の意見や解決策を提示していくことが、論文として大切なポイントだと考えています。



ドキュメント最終審査会

2030年に向けて—
「守るもの」、「壊すもの」、「創るもの」

2015年11月27日、審査委員8名が一堂に会し、約3時間にわたって最終審査を行いました。その議論の一部、誌上に再現します。なお、各論文の応募者の情報は一切伏せられたうえで審査は進められています。

大学生

大学生の部	既存テーマに独自性と実現可能性を追求
	<p>入賞候補論文 *文中での呼称</p> <ul style="list-style-type: none"> • 人に寄り添う医療を目指して—2030年へ向けた医療改革の提言 *「人に寄り添う医療」 • 地域力結集で実現する『中継ぎ保育』の拡充 *「中継ぎ保育」 • 日本のベンチャー市場の活性化にむけて 武者修行退職制度の導入 *「武者修行退職制度」 • 公共オンブズマンの設置—市民の政治参加の架け橋 *「公共オンブズマン」

※他に4つの論文が入賞候補に残りましたが、誌上では受賞作品について取り上げました。

力作それぞれに対し、 審査委員が評価ポイントを発表

谷川—私は「人に寄り添う医療」を最も高く評価しました。かかりつけ医はよくあるテーマですが、グループで行うという提案はユニークで、現実的なアプローチとして納得感がありました。

池上—私は「武者修行退職制度」を1位に評価しました。いったん大企業を退職をして、ベンチャーで武者修行することが一定の企業グループなどで認められれば、大変面白いと思いました。次いで評価したのが「人に寄り添う医療」です。かかりつけ医や予防医といったテーマは例年見られますが、海外では既にあるかかりつけ医制度を、改めて日本での仕組みとして提案しており、実現性があると思いました。

淀川—1位にしたのは「武者修行退職制度」で、大企業とベンチャー企業の間で人材の流動化を図れば、互いが活性化するというアイデアが面白いと思いました。2位は「公共オンブズマン」です。「公共オンブズマン」を公的制度として作ろうという提案は、視野の広がりがあり、高く評価したいと思います。

山之内—これからの日本企業はどこも事業を創造できる社

員がほしいはず。その人材をいかに確保するかという手段として、「武者修行退職制度」は非常に面白いアイデアだと思いました。

中野—私は「中継ぎ保育」が良いと思いました。民間での育児支援はよくあるテーマですが、この作品はロジカルで分かりやすく、論文としての完成度が高いと思いました。課題設定を机上だけで済ませずに現場の調査を行っている点も、説得力を増しています。また、地域の支援者のメリットと安全の懸念への対策をしっかりと述べている点も評価できます。

審査委員
淀川 高喜
研究理事



未来社会を「守る」「壊す」「創る」ものという与えられたフレームの中で論じる今回のテーマ設定は、自由度が限られていて難しかったと思います。その中で独自性があり、実現可能性の高い提案をしている論文を高く評価しました。

最相—私は「公共オンブズマン」を1位にしました。問題設定と考察プロセスが鮮やかで、疑問が次々と説明されていく文章の運びも良かったです。アイデア自体も非常に具体的に書かれていて、良質な意見だけが受理されるシステムまで考えている点も評価したいと思います。ただ、最後に本人が「実現可能性を疑っている」と書いている点は残念でしたね。

三浦—「公共オンブズマン」は、守破離の「守る」「壊す」「創る」という枠組みを意識して論理を展開していますし、正当性や実現性、有効性を兼ね備えた設計も評価できます。特にオンブズマンの役割や機能が詳細に規定されている点が良いと思いました。

谷川—私は「武者修行退職制度」については、実現性に疑問を感じます。会社はやはり、一番出したい人を出すものだと思うので、この制度は機能しないのではないのでしょうか。ただ、テーマが今日的だと思ったのと、明快な主張がある点で評価できると思います。

グループによるかかりつけ医制度を 提案した論文が大賞に

谷川—大学生の部は、審査委員が上位に評価した作品が分散していて、大賞を決めるのが難しいですね。評価の点数としては「人に寄り添う医療」が一番高く、次いで「中継ぎ保育」、「武者修行退職制度」、「公共オンブズマン」は評価が分かれています。



三浦—得点が最も高く、グループによるかかりつけ医というアイデアの実現性も高い「人に寄り添う医療」が大賞にふさわしいと思います。

中野—「中継ぎ保育」は提案の壮大さはありませんが、よくアイデアを盛り込んでいて、支援者にも受ける側にもメリットがあるように、深く案を練ってある点を評価したいと思います。「人に寄り添う医療」も日本にとって素晴らしい提案ですので、どちらが大賞でも異論ありません。

谷川—それでは、大賞は「人に寄り添う医療」でよろしいでしょうか。

一同—賛成。

谷川—「人に寄り添う医療」と甲乙つけがたい「中継ぎ保育」は、優秀賞で良いと思います。では、「武者修行退職制度」はいかがでしょうか。

池上—「武者修行退職制度」だと大企業が要らない人を出してしまうという意見もありましたが、これは自ら出たいという人を認める制度だと思いますので、私はこれも優秀賞でいいと思います。最相さんが高く評価されている「公共オンブズマン」は、特別審査委員賞でいかがでしょうか。

谷川—そうですね。では、大学生の部の大賞は「人に寄り添う医療」、優秀賞は「中継ぎ保育」と「武者修行退職制度」、特別審査委員賞は「公共オンブズマン」に決定します。

留学生の部	日本への鋭い観察眼とユニークな視点
	<p>入賞候補論文 *文中での呼称</p> <ul style="list-style-type: none"> • 問題解決学科—「守破離」の精神から *「問題解決学科」 • 中国留学生から見た青森県の地域活性化について *「青森のりんご」 • デジタル遊牧民は電気羊の夢を見るか—選択代行時代への移行 *「デジタル遊牧民」

※他に3つの論文が入賞候補に残りましたが、誌上では受賞作品について取り上げました。

日本での生活が学びの土台に

中野—留学生の論文には「守る」「壊す」「創る」という枠組みに即していないものもありました。その中で、「問題解決学科」は論文としてよくまとまっていて、文章力も高く、実現性の高い具体的な提案がなされていると思いました。

池上—私も「問題解決学科」を最も高く評価しました。文部科学省が国立大学には人文系学科は要らないかのような通知を出したことに對して、単に反対するだけではなく、具体的な提案が述べられている点に大いに共感しました。

三浦—「問題解決学科」の設計は非常に良くできています。「守る」「壊す」「創る」にそって記述されており、日本人をよく観察してゴールを設定し、論理展開している点も評価できると思います。

最相—留学生の論文は、グローバルでありながら自分の足元をしっかり見ている、日本に暮らしていることが学びの土台になっているという印象を持ちました。その中で、私はあえて「青森のりんご」を1位にしました。自分が現在暮らしている場

所で問題意識を持ち、そこから世界を見るという、複眼的な思考が面白いと思います。中国でりんごを売ってアンケートをしたり、小売業者に話を聞いたり、積極的に取材を行う姿勢も評価したいですね。

山之内—私が1位にしたのは「デジタル遊牧民」です。今、ビッグデータと人工知能によって人間の仕事が奪われるということが議論になっていますが、「人間らしさを守らなくてはいけない」という筆者の主張は心に響きました。



審査委員
中野 ひなつ
証券ソリューション事業本部HRM室 室長



目指す社会を明確に描き、提案の実現のための具体策を深く掘り下げているかどうかを評価しました。留学生の論文には日本人のクリエイティビティや日本のポテンシャルに言及したものが、背中を押され、勇気づけられる思いを持ちました。

池上—「デジタル遊牧民」には、SF小説『アンドロイドは電気羊の夢を見るのか?』を読んでいることで、まずひきつけられました。この作品を論文として評価してよいのかどうか議論が分かれるところだと思いますが、文章が非常に上手く、読ませる力があることは確かだと思います。

最相—「デジタル遊牧民」はまずタイトルからして印象的で、コンサルティングと相談が融合していくというストーリーも興味深く読みました。

枠にはまらない2作品が特別審査委員賞に

谷川—全員の評価を合わせると、5人の審査委員が1位を付けた「問題解決学科」が大賞で異論はないと思います。

一同—賛成。

谷川—次いで評価の高かった「デジタル遊牧民」ですが、この作品は大変興味深い内容なのですが、テーマの枠組みにあてはまらず、他の論文と比較しにくいですね。「青森のりんご」も今回の候補作の中で全く異質な作品だと感じますが、最相さんが言われるように、取材に基づいて論じて

審査委員

山之内 亜由知

生産革新ソリューション開発二部
上級システムコンサルタント



自分自身が技術系なので、技術系のテーマの論文には大いに興味をひかれました。今回は論文としての完成度よりも、むしろ“読んでいてはっとさせられる”、“何らかの気づきが得られる”というポイントを重視して評価しました。

いる点では頭抜けていますね。

最相—「青森のりんご」は非常に留学生らしいというか、他の人には書けないユニークな論文だと思うのです。一生懸命自分で見たり聞いたり調べたりしたことを書いていますし、日本と中国の生活習慣を比較した表も実に興味深いです。おそらくこの筆者は、日本で暮らしながら気が付いたことを、日頃からメモしていたのではないかと思います、ぜひこの人に出会ってみたいと思ったのです。

谷川—「会ってみたい」というのはいいですね。

淀川—留学生による、青森からの着眼点というローカル性も面白いですし、特別審査委員賞にふさわしいと思います。

谷川—私は、今回の留学生の部は特別審査委員賞を2つ出してもいいと思うのです。「デジタル遊牧民」と「青森のりんご」は他とは全く違うタイプの作品ですが、本コンテストがどんな作品を求めているかを考えると、こういった異質な作品も評価していきたいという思いがあります。

池上—特別審査委員賞が2作品ということはこれまでありませんよね。

中野—表彰式が盛り上がりそうです。

池上—最相さんが推す「青森のりんご」は特別審査委員賞でよいのではないのでしょうか。

谷川—「デジタル遊牧民」についてはいかがでしょうか。

池上—この作品もぜひ特別審査委員賞に推したいです。

谷川—そうですね。それでは、特別審査委員賞は今回は2作品にしましょう。留学生の部の大賞は「問題解決学科」、特別審査委員賞は「青森のりんご」と「デジタル遊牧民」に決定します。

高校生の部

筆者の強い関心や実体験に根差した説得力

入賞候補論文 *文中での呼称

- 「地方院」構想—民主主義と地方を守り、無意味な議会を壊し、私たちの議会を創る *「地方院」
- 日本で本当にグローバルな人材を育てるには *「グローバルな人材」
- 2030年バイキング式社会の実現へ向けて *「バイキング式社会」
- 世界に目を向けさせるために、「世界問題」の授業を行おう *「世界問題の授業」

※他に5つの論文が入賞候補に残りましたが、誌上では受賞作品について取り上げました。

グローバルな課題を扱う作品が多いことが特徴

最相—選挙権の18歳への引き下げによって、高校生の部で政治の課題を扱う論文が増えたという印象でした。その中で「地方院」という発想は独創的で、具体的な仕組みが細かく記述されていて、想像力を喚起されました。政治を内側から考えるという当事者意識の高さに感銘を受けました。

池上—私も「地方院」を最も高く評価しました。参議院を変えて地方院を作ろうという提案は、アメリカやロシアの上院と性格に近いものですが、今の日本の参議院は選挙制度が変わることによって衆議院と差がなくなって、結果的に1票の格差という問題が起きています。全く違う地方院にして地方代表という位置づけにすれば抜本的な対策になり、憲法改正は必要ですが、非常に良いアイデアだと思いました。

淀川—高校生が政治への関心から提言を行っている論文はこれまであまりありませんでしたし、「地方院」は論理もしっか



り組み立てられています。

三浦—「地方院」は地方分権の実現をゴールに据え、「守る」、「壊す」、「創る」、という3つの視点をしっかり書いている点が評価できます。特に現状を踏まえた観察がうまく盛り込まれていて、実現性や効果が精査してある点も説得力を強めています。

中野—私が最も評価したいのは「グローバルな人材」です。高校生の論文にグローバルな問題を扱ったものが多い中で、日本の思いやりの心を守り、内向的閉鎖性を壊し、主体性を持ちながら「他文化と多文化を尊重する」という主張に、多くの論文のベースに流れる考えが集約されているように感じました。オーストラリアでの実体験も納得力を高めていました。「世界問題の授業」も大変優れた論文で、完成度は一番高いと思いましたが、まとも過ぎているがゆえに、もう少しオリジナリティが欲しいという感想を持ちました。

三浦—確かに「グローバルな人材」には、自らの観察や実体験に基づく説得力がありますね。

谷川—私は「世界問題の授業」が主張が明快で、ユニークで、論文としての完成度が高いと思いました。同じグローバルな問題を扱った「グローバルな人材」も面白かったのですが、主張の明快さでは「世界問題の授業」のほうに納得感がありました。

最相—「世界問題の授業」は、小学生から高校生にかけて段階的に世界への視野を広げていく、とても論理的に組み立てられた優れたプロジェクトだと思うのです。また、「思いやりだけでは駄目なんだ」ということを具体的に指摘している点や、「知っていることと分かっていることとは違う」という気づきも、とても良いなと思いました。

山之内—「世界問題の授業」は文章が力強く、内容もよく練られていて、文句なしで素晴らしい論文だと思いました。

三浦—グローバルな問題に取り組める人材によって豊かな日本を創ろうという「世界問題の授業」の主張は明快で、教科の設計も大変よくできています。

池上—「世界問題の授業」は、世界の出来事にもっと目を向けるために、日本の教育を変えるきっかけになるのではないかと思いますね。

山之内—私自身がワーキングマザーであることから、ライフステージに応じて仕事を選んでいるような社会になったら夢があるなと思い、「バイキング式社会」を評価しました。

政治への関心に根差した「地方院」の論文が大賞に 優秀賞には3作品を選出

谷川—評価の集計を見ると、最も点数が高いのは「地方院」です。

池上—「地方院」も「世界問題の授業」も上位に評価が集中しています。これだけ集中しているのも珍しいので、どちらが大賞でもおかしくないのではないのでしょうか。

山之内—1位を付けた人の数は「地方院」のほうが多いですね。

谷川—それでは「地方院」を大賞として、次点の「世界問題の授業」を優秀賞とするのでよろしいですか。

池上—「世界問題の授業」は文句なく優秀賞ですね。

淀川—「グローバルな人材」は評価が分かれています。

谷川—分かれていると言っても、3位までに評価している人が多いので、優秀賞で問題ないと思います。「バイキング式社会」

は評価が分散していますが、いかがでしょうか。

中野—「バイキング式社会」は高校生らしい夢があるので、優秀賞にふさわしいと思います。

谷川—そうですね。高校生の部の入賞論文は、大賞は「地方院」、優秀賞は「世界問題の授業」、「グローバルな人材」、「バイキング式社会」、以上の4作品に決定します。

審査委員

野呂 直子

コーポレートコミュニケーション部 部長

高校生と大学生の論文が力作ぞろい、読み応えのある作品が多かったことを嬉しく思っています。「目指したい2030年の社会」について課題設定し、そこにオリジナルな「守る」、「壊す」、「創る」、という視点を加えているものを高く評価しました。



受賞者の皆さん、おめでとうございます!



2015年12月25日、受賞者とその家族、学校関係者を招いて、東京・丸の内の東京ステーションホテルにおいて「NRI学生小論文コンテスト2015」の表彰式と祝賀会を開催しました。

表彰式は、NRI代表取締役会長兼社長の嶋本正の祝辞からスタート。

「NRIは、今年、創立50周年を迎えるにあたり、『変える意志、変わらぬ信念。』というキャッチフレーズを掲げた。この言葉を皆さんにもプレゼントしたい。これから人生を切り拓いていくとき、さらなる成長のために今までの自分を変えていく“変える意志”と、今まで育んできた良いところや誇れるものを持ち続ける“変わらぬ信念”、この2つを大切にしていってほしい」と祝いの言葉を述べました。

続いて、嶋本社長から受賞者一人ひとりに表彰状と副賞を手渡し、受賞を祝いました。



大賞受賞者の言葉



[大学生の部]
大賞
岡口 和也 さん
岡口 正也 さん

このように素晴らしい表彰式や祝賀会を開催していただいたこと、また、世の中に対して学生が意見を表明できる場を作ってくださったことを大変感謝しています。医療に関わる問題について弟と力を合わせてまとめることができ、自分たちが普段考えていることを形のあるものにする、大変良い機会だったと感じています。今後、弟はおそらく医者として地域医療に携わっていくと思いますし、私としても今回の経験をもとに、将来に向けてさらに頑張っていきたいと考えています。(写真左:正也さん)



[留学生の部]
大賞
李 超君 さん

日本に留学するとき、実は「中国や韓国にいる友達みんな、自分の学業や仕事があり、結婚した友達もいる。私が今日本に留学することは正しいことだろうか?」と考えたこともありました。今は、「日本への留学は私にとってきわめて重要な決断だった」とはっきり言うことができます。日本に来たからこそ、このように素敵な賞をいただくことができましたし、日本は私に素晴らしい先生や、大切な人との出会いを与えてくれました。本日はありがとうございました。



[高校生の部]
大賞
橋本 康平 さん

政治について勉強していると、真面目とか優等生というイメージを持たれがちですが、自分は全くそんなことはなく、私にとって政治は趣味という感覚です。ニュースを見たり新聞を読むことは大変楽しく、好きでやっていますし、学校の教科ではない、いろいろな知識を得ることが活力になっています。きっと、こういうことから未来のイノベーションは生まれてくるのではないかなと感じています。みんなが勉強を楽しんで、これからの未来を良くして行けたらいいなと思っています。



受賞者が“目指したい未来社会の姿”をプレゼン



受賞者による論文発表のあと、審査委員長・NRI 理事長の谷川史郎、特別審査委員の池上彰さん、最相葉月さんが、お祝いの言葉とともに、受賞論文一つひとつに講評を述べました。

審査委員長の谷川は、「幅広いテーマで書かれた論文を比較するのはかなり難しかったが、審査の過程で出た“この論文を書いた人に出会ってみたい”という言葉が審査のポイントになった」と総評。池上彰さんは「今回のコンテストはとりわけ高校生の部のレベルが高く、読み応えがあった」、最相葉月さんは「今回初めてプレゼンテーションを聞いたが、本当に素晴しかった」と、おふたりそれぞれが受賞者をたたえました。



2015年12月25日に開催された表彰式において、表彰状授与のあと、受賞者による論文発表が行われました。

特別審査委員を務めたジャーナリスト・東京工業大学教授の池上彰さん、ノンフィクションライターの最相葉月さんをはじめ、NRI社内審査委員、NRI役員、学校関係者、受賞OB・OGらを前に、各受賞者が論文の内容を発表しました。

受賞者はみな緊張しながらも、それぞれが考える“2030年に向けて—「守るもの」、「壊すもの」、「創るもの」”を堂々とプレゼン。会場一同は受賞者の提案に惜しみない拍手を送りました。



祝賀会

論文発表に続いて祝賀会が行われました。和やかな雰囲気の中、池上さんや最相さん、NRIの審査委員や役員・社員と、論文の内容や将来の夢について語り合ったり、記念撮影をする受賞者の姿が見られました。



コンテストへの応募動機

2030年に向けて——「守るもの」、「壊すもの」、「創るもの」

大学生

大学で「社会デザイン論ゼミ」に所属しており、これからの未来を創造していくことにとても興味があります。この興味が、今回の「2030年に向けての**理想的な社会を提案する**」というテーマと一致し、応募しました。

15年後、自分が35歳で世の中の中心になって働いている時代がどんな時代になっているのか興味を持ち、**自分で未来を創造してみたい**と思ったからです。

未来志向のテーマに関心を持ったから。文字に起こすことで自分の考えを深めることができ、また学びの域を学校に留まらせたくないと思ったので、応募に踏み切った。

テーマにひかれて

テーマがとても新鮮で、日頃の**問題意識をアウトプット**できることに魅力を感じました。

日頃から胸の中にあった**アイデア**を、**論文という形で外部へと発信**することに大きな意味があると感じた。アイデアを文章化することは、その欠点や改善点を知る手がかりにもなり、大変有益だった。

考えを発信したい

自分の**想いを文章にし、誰かに伝える**ことに強い興味を感じながら大学生活を過ごしてきた。「守り、壊し、創る」というテーマと、自分が成し遂げたいことへの想いに、通ずるものを感じた。

ゼミで社会問題を解決する研究をしているが、これまでの視野では過去や現在の問題ばかりに関心が向きがちで、将来に対する意識が低いと感じていた。本コンテストは「**未来**」に向けて私の視野を広げてくれると思い、応募することにした。

「自分たちが担っている “2030年”の社会について考えてみたいと思った」

学生が考えることをコンテストという場を借りて発言できることは、学生にとって非常に有り難く、少しでも**自分の想いが伝われば**と思った。

留学生

図書館のポスターでコンテストを知り、「守破離」というテーマに興味を持ちました。**外国人として日本語で論文を書く**ことも一つの挑戦だと思い、応募しました。

留学生としてできること

今日の**日本の社会問題は世界各国にも将来起こり得る**もので、日本の社会問題を解決することは非常に重要である。商学研究科の大学院生として、経営の立場から問題を解決していきたいと思った。

高校生

遠いようで近い2030年を考えたい

遠いようで近い2030年は、自分たちの世代が社会を成り立たせる時代です。そんな15年後をどのような社会にしていけるか、なかなか考える機会もないと思ったので、この機会に自分なりに考えようと思いました。

自分たちが社会を担っていく時代は、遠いようで間近に迫ってきているのだと、応募要項を読んで実感しました。この論文を書くことで**自分たちの未来について考える契機**としたいと思ったからです。

学校に掲示されているポスターに惹かれた。「2030年に向けて」という文字を見たとき、「自分が30歳になったとき、1人1人が意志を持って暮らしているといいな」と、自然に頭の中に浮かんできた。この**思いを将来に向けて発信したい**と思った。

東京オリンピックが2020年に開催されることが決定し、未来を楽しみに思う人が増えたと思います。明るい未来を創るために必要なものを、自分なりに考え、同じように**未来を考える人たちと意見を共有**できたらと思い、応募しました。

高校生の視点で——

高校生ならではの視点で考えたアイデアを多くの方々に見てもらい、知ってもらいたかったから。また、自分の意見を発表する機会が私の日常生活で少ないため、良い機会だと思いました。

「2030年に向けて」というタイトルに興味を持ち、**理想の未来を描ける**このコンテストに応募したいと思いました。

未来社会を築いていくのは私たちであるのだと改めて思い、**17歳の視点**で未来に向けて、この論文のテーマである「守るもの」、「壊すもの」、「創るもの」を考えてみようと思ったからです。

私は交流協会奨学金留学生として、日本と台湾の架け橋という使命感を持っている。野村総研は東アジア各国の政策提言に活躍しているので、私の論文が**東アジアの平和に貢献できれば**と考えた。

日本でも選挙権が18歳からとなり、世界の状況がどのようなものかを知りたいと思いました。自分自身も**2年後に選挙権を持つことの重要性を知りたい**と思いました。

NRIグループ社員による審査の感想

2030年に向けて——「守るもの」、「壊すもの」、「創るもの」

1次審査にあたった有志の社内審査委員の感想の一部をご紹介します。

大学生

論文としての体裁が相応に整っており、問題意識も高く、それぞれに**読み応え**があった。しかし「2030年に向けて」なのだから、もっと想像を膨らまして**大胆な着眼があっても良かった**のではないかと思う。

筆者の「想い」を熱く書いている半面、最終的にはどこか綺麗におさめようとしているところもあった。**夢や想いを広げて**、大きな意味で「守破離」を捉えて論述してほしい。

「世界」というより「**日本**」の問題点に**着眼しがちな**気がする。「世界」の問題にもっと取り組んでもらいたいという気持ちがあります。

より大胆な構想を

大きな構想を描いて、そのためのアプローチという、大学生らしい論文を期待していたが、自分の**専門領域での課題解決に留まってしまった**ものが多かったように思う。

「**壊すもの**」「**守るもの**」の記述に苦戦している印象を受けた。普段「**創るもの**」はよく考えるが、壊したり、守ったりということはなかなか考えないということだろう。

「2030年代、日本は、世界はどんな姿になっているか？」という問いに対して、応募者が**夢想する未来図が語られているものがとても少なく**て残念。2015年の現在の問題にとらわれすぎて、その解決案の字数が多くなっている。

高い問題意識で読み応え

多くの応募者が、大学での専門に関する研究、活動を通して、日頃感じている問題意識をベースに議論を展開している点が印象的だった。対象領域に対して**情熱を持ちつつも、冷静に問題を分析**しようとする学生が多く、好感が持てた。

「**創るもの**」については**各自の主張**がそれなりに記載されていたが、実際に何かを創っていくにあたっては「**守るべきもの**」「**壊すべきもの**」／壊さなくてはならないものは必ず何かあるはずで、その点についてもきちんと考察されているとより良いと思う。

大学生の**問題意識の高さ**には驚きました。ただもう少し、世間では聞かないような独自の**アイデア**があると**もっと良かった**と思います。

高校生

実体験に基づく新鮮な視点

高校生の**真摯で、かつ熱い想い**のこもった文章に触れると、こちらも身が引き締まる思いがする。自分たちの未来は自分たちで創っていくんだ！という**気概**が感じられる作品は、**読んでいて気持ちが良い**。

高校生にとっては、2030年はまさに自分たちが活躍する時代であり、書きやすかったのか、**例年に比べて出来が良かった**ように感じた。

変に大人びた考えではなく、**身近な出来事をきっかけ**に改めて自分の周囲について考え直し、小論文としてまとめた人が多いと感じた。

本人の体験に基づいた論文は納得感があった。創りたいものに対して、自分がどのように関わっていきたいのか、どう**いう行動を起こしたいのかを、もう少し具体的に**書いてほしい。

各人の経験からの問題意識・将来展望が多岐にわたり、とても興味深かった。総じて**文章力が高いもの**が多かった。

さまざまな視点の論文があり、読んでいて興味深く新鮮でした。**実体験から社会問題を考察**する論文が多くあったことが印象的でした。

全体的に感じたのは、自ら新しい社会を実現するためにどう関わっていくか、**明確に書かれていない点**です。抽象的・客観的な分析や論説に終始して**アピール力が不足**していると思いました。

より深い考察を

情報としてインプットされたことからではなく、**実体験から考察した論文が印象に残った**。情報が溢れる世の中だからこそ、**リアルな体験から自分の体や心で感じる**ことこそ今後守るものであり、そこから創造力が生まれるのではないかと感じた。

2030年の未来を見ながらも、「壊す」など現在の制度、価値観を変える提案が必要となる**難しいテーマ**だと思う。提案内容が**感想レベルで終わってしまっている**論文がいくつか見られたのが残念だった。

今回の**テーマは特に難しかった**のかなという印象を受けました。「**守・破・離**」がそれぞれ何を指しているのか不明瞭であったり、文字数の関係か終盤になって考察がやや浅くなる論文が多かったように思います。

このテーマの小論文を執筆するには、どの論文も**参考文献が少ない**のではないか。普段は読まないような本も読み漁って、さまざまな評価軸を知った上で論文を書いてほしい。

「若い世代の真摯な問題意識に刺激を受けた」

留学生

留学生としての視点

初めて留学生の部の審査を担当したが、自分が見ようとしてこなかった世界に引きずり込まれるような**迫力を感じた**。知の探求あり、世界情勢あり、社会問題ありと、バラエティに富んだ論文をどれも楽しく読ませてもらった。

全体的に難しい言葉を使った論評や一般論の部分が多いためか、主張がぼやけている印象が強かった。問題意識を明確にした上で、論理展開をシンプルに考えて、身の丈に合った内容で肉付けをすることが望ましい。また、**留学生としての視点**を是非とも忘れないでほしい。

日本社会への期待を感じた

東アジアからの留学生が多いと思われるが、歴史認識をめぐる国家間の対立に**焦燥感**を感じていることが端々から伝わった。**自国のナショナリズムとの間に揺れながらも**、日本や日本の社会に対して期待をしている。我々はその**期待に応えられる社会にする必要がある**と感じた。

留学生だけに、海外との比較から日本の課題を考えている点が印象に残りました。日本が「**課題先進国**」としての**責務**を負っているということを改めて意識させられました。

NRIグループ社員によるコンテスト告知活動 全国の学校を訪問して応募を呼びかけました

NRI学生小論文コンテストの告知活動は、有志のNRIグループ社員による「社内応援団」が大きな役割を担っています。
ポスターやチラシ、受賞論文記録集を持って、母校や全国各地の学校を訪問。生徒や先生にコンテストと今回のテーマを説明し、応募を呼びかけました。

芝浦工業大学 大学でのOB講演で紹介 矢部 裕亮 (流通システム二部)

母校から要請を受け、「学生の間(いま)に何をやっておくべきか」をテーマに講演しました。その「いま」の先には、自分だけでなく、世界や日本社会の未来がどのようになっていて欲しいかを真剣に考えることが重要だと思います。それを考えるきっかけにもなるため、講演後にこのコンテストを紹介しました。



東京都立立川高等学校 日々の仕事では得がたい “ほっこり感”

五十嵐 卓 (NRIデータテック株式会社 取締役総務部長)

母校を訪問し、本コンテストを説明し、応募をお願いしました。本コンテストにエントリーしている学生の皆さんが、学業の傍ら、大半は夏休み期間を費やして論文を仕上げていることに、頭が下がる思いです。文献調査に加えて、中には取材等のフィールドワークを伴っている論文もあり、「今どきの若者も捨てたものじゃない。失われた20年の間にも開花に備えたしっかりとした芽吹きがあった」と実感しています。本コンテストは、日々の仕事ではなかなか得ることのできない「待ちわびた春が近づいて来たほっこり感」が満載です。



福井県立藤島高等学校 未来に目を向けてもらうきっかけに 宇野 博志 (情報セキュリティ部)

母校からの依頼で、「働くこと」について講演しました。後輩に「自分の興味ある分野や長所を伸ばし、多くの友人を作り、広い見識が持てるよう頑張ってください」と激励するとともに、未来についてしっかり考える機会として、このコンテストを紹介しました。今回応募した生徒さんがいると聞いて、大変嬉しく思っています。



デジタルハリウッド大学 実践的クリエイター人材への 刺激に

佐野 則子 (保険営業推進部)

未来社会を描く「守破離」というテーマで、クリエイターを刺激してみたいと思いました。当大学関係者の知人に本コンテストを紹介したところ、学内グループウェア上に掲示していたくことになり、応募につながりました。私自身は1次審査にも参加し、若者の考えるさまざまな「守破離を踏まえた2030年の社会」を覗かせて頂きました。



先生から見た「NRI学生小論文コンテスト」

弘前大学人文学部 留学生の部 特別審査委員賞受賞者の在籍校 黄 孝春 教授



地方国立大学はいま、地域で活躍する人材の育成に力を注いでいます。私のゼミでは、農産物輸出をテーマに教育研究が進められています。

2015年2月、上海でゼミ生による青森県産りんごの試食販売が実施され、青森県産りんごの消費状況に関する貴重なデータを収集することができました。金春海さんの論文は、このような経験に基づいてまとめられたもので、審査委員に評価されたのだと思います。

神戸朝鮮高級学校 高校生の部 優秀賞受賞者の在籍校 李 英三 教諭



前回の大賞、今回の優秀賞と、本校から2年連続で受賞者が出たことは嬉しい驚きです。これも全て生徒の努力の結果であると思います。毎年生徒には応募を呼びかけ、手を挙げた生徒に課題を出して夏休み中に指導を行っています。今回の受賞者はラグビー部のキャプテンで受験生。忙しい中、粘り強く課題に取り組みました。生徒には日頃から「できるだけ本を読むように」、また「目標を持ってチャレンジすることが大切」と伝えていきます。コンテストは一つの目に見える登竜門であるため、生徒の大きな自信と励みになります。来年度以降も応募を希望する生徒を学校として応援し、指導していきたいと思っています。

千葉県私立市川高等学校 高校生の部 優秀賞受賞者の在籍校 浅地 道子 教諭



当校の生徒が、前々回の優秀賞に続いて今回優秀賞と奨励賞を受賞し、嬉しく思っています。本コンテストには、2013年から学校単位で応募を始め、高校2年生が「構造読解」という教科の夏休みの課題として取り組みました。「構造読解」は文章を構造的に正しく読み、人に正しく伝わるような構造で表現する力を付ける教科です。当校はスーパーサイエンスハイスクールの指定を受けており、教科の壁を越え、生徒が自らの教養を深めるさまざまなプログラムも組まれています。学外の小論文コンテストへの挑戦はその延長線上に位置付けているので、ぜひ来年度以降も学校として応募を続けていきたいと考えています。

岐阜県立関高等学校 高校生の部 奨励賞入賞者の在籍校 林 直樹 教諭



当校では、スーパーグローバルハイスクール事業を通じて学んだ成果を、小論文にまとめてコンテストに応募するよう奨励しています。外部による審査は、生徒・教師双方にとって緊張感ある得難い経験となります。当校からの2年連続の奨励賞入賞は、本人のみならず、同級生・後輩、そして指導にあたる教師にとっても良い励みとなりました。他者を受け入れ、自己の考えをまとめ、正しく表現できる人間。われわれの目指すグローバル人材の「鍛錬の場」として、本コンテストへの参加を次年度以降も生徒たちに促していきたいと考えています。

おわりに

「NRI学生小論文コンテスト」は、おかげさまで10回目を迎えることができました。応募論文も過去最多の2,622作品が集まり、レベルが高く甲乙付けがたい多数の論文の中から、白熱した議論を経て、入賞者を選考させていただきました。

集まった論文を読んでいると、政治・経済・社会・医療・人材育成など多岐にわたる前向きな提案がされており、いつの時代も言われる「今どきの若者は・・・」というネガティブな言葉とは正反対に、明るい希望を感じさせてくれるものばかりでした。この記録集を読んでいた皆さまとも、同じ気持ちを共有できればと思っています。

今回は記念すべき10回めということで、過去に受賞したOB・OGの方にも授与式にご参加いただき、第1回の受賞者からはスピーチをいただきました。受賞者の皆さんが社会で活躍している様子を伺うと、この10年の重みを感じ、続けることの大切さを改めて感じます。

今後も受賞者や応援していただいている皆さまと一緒に、このコンテストを育てていきたいと思います。すでに準備を進めている2016年度のコンテストにも、たくさんの斬新な提案が集まり、出会いと気づきが生まれるよう、皆さまの応援をよろしく願いたします。

2016年3月

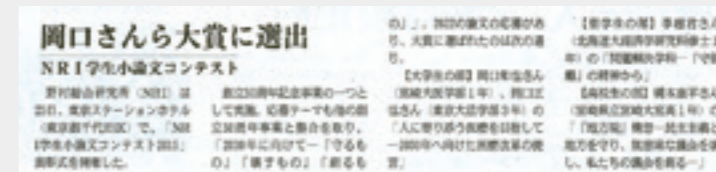
「NRI学生小論文コンテスト2015」事務局

メディアでの掲載

「NRI学生小論文コンテスト」は、毎回さまざまなメディアに取り上げられています。その一部をご紹介します。



「宮崎日日新聞」
2015年12月23日付
(宮崎日日新聞社提供)



「フジサンケイビジネスアイ」 2015年12月28日付 日刊21096号



「北海道新聞」 2015年12月26日付



「東奥日報」 2015年12月9日付



「朝鮮新報」 2016年1月13日付



「高校生新聞」
2016年3月1日発行
第234号